

稱讃 一四三号

一〇一三年三月一日発行



信にまた二種あり。一つには聞
より生ず、二つには思より生
ず。この人の信心、聞より生じ
て、思より生ぜず。このゆゑに
名づけて信不具足とす。
また二種あり。一つには道あり
と信ず、二つには得者を信ず。
この人の信心、ただ道ありと信
じて、すべて得道の人ありと信
ぜざらん。これを名づけて
信不具足とす。

発行 浄土真宗本願寺派 稱讃 寺

〒二二一〇〇七五

東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号

TEL 〇三―五二四二―二〇二五

FAX 〇三―五二四二―二〇二六

HP shousanji.com



去る二月二十三日、恩師・岡亮二先生の十七回忌が龍谷大学大宮
学舎本館講堂で営まれ、出席いたしました。3年ぶりの京都です

岡亮二先生の十七回忌のご法要を龍谷大学の
大宮学舎本館講堂でおつとめした後、東急ホテ
ルで、偲ぶ会が行われました。数人の方からの
先生との思い出話を聴いているうちに、当時、
ゼミで岡先生に質問したことを思い出しまし
た。

岡先生の『教行信証』の読み方に興味があり
ましたので、「先生は、何故、そのような読み
方が出来るのですか？」とお尋ねしました。岡
先生は「戦後、教育が一八〇度変わり、それま
での価値観が覆されてしまった。そのことも
あって、疑問を持つて、読んでいるのです。」
（記憶が曖昧ですが、そのようなことをおっ
しやったような気がします）

「疑いを持つ」とはどういう意味で仰ったの
でしょうか。

人の解釈を鵜呑みにしないのも、そういうこ
とだと思えます。「善知識」は敬うべきです
が、「善知識だのみ」になつてはいけません。
また、『教行信証』を読む場合は、何故、親鸞
聖人は、ここで、このような引用文を用い、別
の文をくつつけておられるのか等を問いつら
読んでいくことを仰っておられたのかなと思
います。「末席を汚す」ような私でしかありま
せんでしたが、阿弥陀さまのご本願を疑つてか
かりなさいと言われたことではないでしょう。
また、他人のことを疑えというより、自分自身
のこころ、捉え方をこそ、疑いなさいと言われ
ておられたのかなと今となつては思うことで
す。それなのに、他人の信心のあり方を疑つて
みたり、あの解釈はおかしいと批判ばかりして
いるような私です。

表記の御文にある「この人」とは、私自身の

ことなのでしょう。

真から自分の「善知識」と言える人がいるだろうか。「自分の親がそうだ」とか「岡先生がそうだ」と。どうも、うわべだけになっているのかもしれない。

『親鸞聖人御消息』第十六通に、《故法然聖人は、「浄土宗の人は愚者になりて往生す」と候ひしことを、たしかにうけたまはり候ひしうへに、ものもおぼえぬあさましきひとびとのまゐりたるを御覧じては、「往生必定すべし」とて笑ませたまひしをみまゐらせ候ひき。》と仰っておられます

また、ある同僚から「ご門徒さんを善知識としてみているだろうか」と言われたとき、ドキッとしました。門徒さんや身近な方を「ものもおぼえぬあさましきひとびと」として例えるのではありません。生きている今、ライブで「あの方は、確かにご信心の人」と思っているだろうか。論争さえも出来ず、自分の信理解の方が正しいと思ひ込んでいないだろうか。先に「阿弥陀さまのご本願を疑ってかきりなさいと言われたことではないでしょう。」と申しましたが、阿弥陀さまのご本願を疑って罪福を信じている私でしかなく、そういう私でしかないと思ひじているのかもしれない。

「唯可信斯高僧説」（正信偈）にありますように、「阿弥陀さまの心には、全く疑心がありませんよ」と伝えてくださっている方々のお声を聞いて参りたいと思います

稱讃寺 春季彼岸会法要

ご案内

暖かくなったかなあと思ったたら、少し肌寒く感じたりしますが、着実に春が近づいておきます。仏さまのお心は、いつもどんなときも私に寄り添ってくださっておられるのでしようが、なかなか、それに気づかないでいる私です。お彼岸を迎えて、あらためて共に味わいたいと思います。

トピック

親鸞聖人生誕八五〇年
特別展として慶讃法要
期間、京都国立博物館で

開催される「親鸞展」で、「安城御影」が展示されます。本願寺派所蔵の御影は、一二五五年（建長七年）法眼朝円の筆とされ、親鸞聖人八三歳の姿が描かれています。元は岡崎市の本願寺派願照寺に所蔵されていたそうですが、実如上人（蓮如上人の後継）の懇請により、本願寺に寄贈され、国宝として今に至っています。

願照寺も三河一向一揆で一揆側についており一揆側の中心的僧侶であった空誓の真宗大谷派の本證寺にも「安城御影」が所蔵されております。この絵像は、室町時代のものであり、寺伝では、蓮如上人が、本證寺第六代住職光存に下付されたものと伝えられております。

室町時代に本願寺から末寺に下付されるものはお木仏が主だったようですが、十点程、安城御影が下付されたようです。格狭間が正面に三つ描かれていることから「三狭間御影」とも呼ばれており、願證寺も本證寺もその一つだと考えられます。



国宝「安城御影」
浄土真宗本願寺派所蔵

三河一向一揆について

貢を

空誓

家康

済む

NHK大河ドラマ『どうする家康』で、「三河一向一揆」の場面がありました。

空誓

世界

- ①三河一向一揆 一五六三年（永禄六年）
- ②三方原の戦い 一五七一年（元龜二年）
- ③伊賀越えの危機 一五八二年（天正十年）

を言います。

ステラネットで、「戦国ものの大河ドラマには、確かに宗教勢力との対立や戦いが描かれてきたが、なんだかぼんやりとした「時代背景のエピソード」として出ていただけだった。つまり「一揆を起こす側の言い分」がきちんと描かれてこなかったと思う。『どうする家康』では画期的なのは、一向宗の指導者の空誓上人の説法と、彼と家康との対話は見応えがあった」とコメントされてありました。

家康は、自分こそ三河の主であることに固執していた頃、夢告で亡き今川義元から「われわれ武家は領民に生かしてもらっているのだ。民の信頼を失ったら、われらは死ぬのじゃ。」と諭されます。論語、「子曰く、民、信なくんば立たず」と教えられて、「家康」と改名しても「自分が主だ」と叫んでいるだけでは駄目なんでしょう。戦をするために、当時、年貢を納めるなくとも良かった治外法権の一向宗寺院からも年貢を取り立てようと本證寺に侵入します。そこで、住職の空誓に遭遇します。

空誓 「いくさは民を苦しめるだけ」
家康 「いくさは民のために行うのだから年

納めるべき」と反論。

「武士に納めても無駄」

「では、どうすればいくさをしないのですか」

「知らぬ！」

「武士と寺は生きているが違います。苦しみを（民に）与える側

（苦しむ民を）救う側じゃ」

そのようなやり取りがありました。年貢の取り立てを強行しようとしたが、年貢の

ドラマでの空誓の「仏敵」と言い放った言葉

は戦を扇動しているようでしたが、苦渋の決断だったのでしょうか。本当は何を守るためののか、寺を守るため？、民・信者を救うため？教

えを伝えるため？組織権力を維持するため？だったのでしょうか。とうとう武力の戦いになりましたが、フィクションも大部あると思いま

すが、家康側にも一向宗の門徒さんが、実際多くおりました。複雑な心境だったでしょう。後に家康の重鎮になる本多正信は一向宗の門徒さ

らで、家康を欺き、一揆側の軍師をしていました。家康の前では、わざと足を挫いて、戦から離れていましたよね。

三河三ヶ寺と、不入の特権
本證寺（安城市野寺町）、上宮寺（岡崎市上佐々木町）、勝鬘寺（岡崎市針崎町）は、三河における本願寺教団の拠点で三河三ヶ寺と呼称され、松平広忠（家康の父）の代に守護使不入の特権を与えられていた。

三河一向一揆の発端

三州一向宗乱記では、本證寺での発端説を第一に挙げ、次に本證寺での別説、さらに上宮寺での説を二通り挙げ、諸説あると解説する。（以下略）

（以下略）

不入特権を主張する三河三ヶ寺と、教団の利権を解体して三河国統一を目指す徳川家康との対立が深まり、守護使不入の特権が侵害されたことに端を発して、本證寺第十代・空誓は、上

宮寺や勝鬘寺と共に劇を飛ばし、本願寺門徒を招集して菅沼氏の砦を襲撃した。真宗門徒の松

平家臣や、吉良氏などの有力豪族や今川氏の残党なども加わり、松平氏の本城である岡崎城まで攻め上がり、家康を窮地に陥れる。

本願寺教団とは仲が悪い真宗高田派の有力寺院である桑子明眼寺・菅生満性寺は家康についた。

ただし、こうした一揆の描き方には異論もある。平野明夫は永禄六年の家康の動向について分析し、上野城の酒井忠尚の挙兵が永禄六年六月（もしくはそれ以前）、寺部城の小笠原広重

の挙兵が同年十月以前、東条城の吉良義昭の挙兵が同年十月下旬、一向一揆の発生が確認できるのは同年十二月（もしくはそれ以前）に一揆

軍が本多広孝の土井城が攻撃した後のことである。また、酒井・小笠原・吉良が一向一揆やこれを支持した家康家臣と連絡を取り合ったり、共同作戦を取ったとする形跡がない点（一向一

揆が岡崎城に迫った時期にも自領に留まって岡崎へ兵を進めなかった）に注目して、酒井・吉

良氏らの挙兵と一向一揆はともに家康を標的としたものであるが、あくまでも両者には関連性はなかったとする。

一向一揆側について家康家臣

◆本多正信 戦後は出奔。松平久秀に仕えるなど諸国を流浪し、のち大久保忠世の執り成しで帰参し重用され、創業期の江戸幕府の重臣となる。

◆本多正重 兄の正信と共に参加。のち赦免帰参し戦功を挙げるも出奔し、滝川一益、前田利家、蒲生氏郷に仕えたのち帰参。

◆渡辺守綱 赦免帰参。のち徳川義直の附家老となる。徳川十六神将。

◆蜂屋貞次 永禄七年に降伏帰参。徳川十六神将。

◆夏目吉信 野羽城（六栗城との説も）陥落の際、松平伊忠に捕縛され伊忠の嘆願により赦免帰参。

◆内藤清長 蟄居処分。子の家長は父から離反し家康方として勤めた。

◆加藤教明 戦後に出奔。室町幕府將軍足利義昭に仕えた後、羽柴秀吉に仕える。子の嘉明は秀吉の下で出世した。

◆酒井忠尚 一向一揆勃発より前に、居城に立て籠もっていたとする説もある。また、一揆方と連携していた痕跡が無い。一向一揆収束後も抵抗。

◆石川康正 父の石川清兼は三河の本願寺の信徒総代であったなど、石川氏是一向宗徒と深い関係にあった。ただし清兼の妻（の母）は家康母の妹であり、康正、家成兄弟は家康の従兄弟である。この縁戚関係により康正嫡男の石川数正は改宗して家康方、弟の家成も家康方として参戦。

一揆の収束とその後

永禄七年（一五六四）一月一五日の馬頭原合戦の勝利で、徳川家康は優位に立ち、和議を持ち込み、一揆の解体に成功する。和議の仲介にも関わった水野信元の書状には永禄七年の春には和議が整って国内が平穏になったことが記されている。その後、同年四月には小笠原氏が家康に従い、その後も抵抗を続けた吉良氏と酒井忠尚は追放される。なお、『松平記』では酒井忠尚の追放を永禄七年九月六日としており、家康と一向一揆との和議後も抵抗を続けていたことになる。一揆に与した武士の中には、主君への忠誠心と信仰心の板挟みにあつて苦しんでいる者もあった。またこの時、本宗寺は御坊を消失し、勝鬨寺は伽藍を消失していた。家康は和議を結ぶことで一揆衆を完全に解体させた後、本願寺の寺院に他派・他宗への改宗を迫り、これを拒んだ場合は破却した。

一方、本願寺の寺院の弾圧については次の見方もある。家臣の離反に悩まれた家康は自分に味方した家臣に対して徳政令を出して本願寺の寺院など敵対者からの債務の返済を免除した。ところが、一向一揆との和議後にその扱いが問題になった。和議の仲介にあつた水野信元は徳政令の一部でも認めて欲しいと本宗寺などに申し入れるが、本願寺の寺院は徳政令は和議の条件に反すると反発した。和議の条件と家臣との約束の間で追い詰められた家康は永禄七年一二月もしくはそれ以降に本願寺の寺院の弾圧に踏み切ったとされる。

一揆の終結より一九年後の天正十一年（1583）まで、三河国は本願寺教団禁制の地となった。しかし、家康は本願寺教団に厳格な処分を下す一方、離反した家臣には寛大な処置で

臨む事で家中の結束を高める事に成功したが、本多正信など、一部の家臣は出奔した。一揆のリーダーの一人空誓は、天正十八年（1590）からは家康に接近し、慶長六年（1590）には寺領も与えられ、幕府と親密な関係を築き上げました。

（ウィキペディアより）

現代の世界の情勢を見ても、宗教は純粋に、人々を救うために存在しているのだろうか、考えさせられます。宗教をもつても、人の犠牲無しには、解決？には至らないのでしょうか。

現代は宗教法人であれば、お布施は非課税であり、国から守られていると言え、守られているのでしょうか。が、お寺の者も、生活の上では、お布施する方と同等に課税されます。もし、宗教法人のお寺に課税義務が生じたらどうなるのでしょうか？国民が生活に苦しんでいるのか、増税を強いられると、どうなるのでしょうか？旧統一教会の問題もあり、宗教団体への不信感はあるばかりで、将来、宗教法人格にも課税の義務が生じるかもしれませんね。一向一揆のような状態になるのでしょうか。おそらく、お寺側だけが騒いで、一般的には、当然の如く課税に賛成するかも知れません。

日本において、お葬儀の価格変動は、宗教やその儀礼に対しての価値観の変動とも比例しているのでしょうか。旧統一教会をはじめ、カルト的な宗教への盲信は、許すわけにはいきませんが、仏法を、お念仏を伝えようとしているお寺を同等に見てもらえないようにしていかねばと思います。

親鸞聖人御誕生八五〇年
立教開宗八〇〇年

慶讃法要企画

親鸞聖人を知ろう

第三段 念仏者の生活

み教えを依りどころに生きる者 となり
少しづつ 執われの心を 離れます

でも「少しづつ 執われの心」が離れていきましよう。「執われ」とは「この世の財産や地位、名誉等々」に執われることで、当然ながら、そこには「生きる」ことも含まれます。要するに、死んだ後まで相續できないもののへの執着です。

私たちは、この執着心からなかなか離れることができないものです。しかし、それが阿弥陀如来のみ光に照らされて、死後に至るまで相續できないものとわかれれば、少しづつ心に変化が生じてくるものです。そこを聖人は、

仏のちかひをききはじめしより、無明の酔ひもやうやうすこしづつさめ、三毒をもすこしづつ好まずして、阿弥陀仏の薬をつねに好みめす身となりておはしましてあうて候ふぞかし（註釈版聖典739頁）

と示してくださいました。

ここの「誓いを聞き始めしより」の文が大切です。煩惱成就の凡夫ですが、如来の誓願を知ったならばという意味でしょう。そうすればいかり、はらだち、そねみ、ねたむところが少しづつ遠のいていくもおのだと示してくださいさつていのです。

生かされていることに 感謝して
むさぼり いかりに 流されず

執われの心が薄れてくれば「生かされていることに 感謝」ができます。私たちは多くのご縁によって生かされています。常に自分を中心において、さまざまなご縁を眺めています、ご縁が先にあつての私だということがわかります。そのように思うとき、煩悩的欲求に無批判

新しい「領解文」(浄土真宗のみ教え)

南無阿弥陀仏

「われにまかせよ そのまま救う」の 弥陀のよび声
私の煩惱と仏のさとりは 本来一つゆえ

「そのまま救う」が 弥陀のよび声

ありがとう といたदैて

この愚身をまかす このままで

救い取られる 自然の浄土

仏恩報謝の お念仏

これもひとえに

宗祖親鸞聖人と

法灯を伝承された 歴代宗主の

尊いお導きに よるものです

み教えを依りどころに生きる者 となり

少しづつ 執われの心を 離れます

生かされていることに 感謝して

むさぼり いかりに 流されず

穏やかな顔と 優しい言葉

喜びも 悲しみも 分かち合い

日々に 精一杯 つとめます

に従うことはできません。

また、貪・瞋・痴の三毒の煩惱は死ぬまで無くなりませんが、親鸞聖人がお示しくくださったように「無明の酔ひもやうやうすこしづつさめ」てくるに違いありません。これらを「むさぼり いかりに 流されず」と言い表しているのです。くれぐれもそのように努力しなければならぬという意味ではありません。自ずからそのような念仏生活ができるという意味です。ご注意ください。

穏やかな顔と 優しい言葉
喜びも 悲しみも 分かち合い

「和顔愛語」は法蔵菩薩修行の徳目の一つです。阿弥陀如来はいつも私たちに寄り添い、私の喜び悲しみを共にしてくださる仏さまです。善導大師は、阿弥陀仏と念仏の衆生との関係を親縁で示してください。親しい間柄という意味です。阿弥陀さまと私が親しい間柄ということをごころに思い浮かべるとき、自然にこころ穏やかになり、顔や言葉にあらわれるものです。私の優しい態度や言葉は、広く他におよび、曇鸞大師が念仏者を「四海のうちみな兄弟とするなり」(註釈版聖典310頁)と言われるような輪が広がっていきます。すなわち、「穏やかな顔と 優しい言葉」また「喜びも悲しみも 分かち合」う生活が送れることになるのです。

日々に 精一杯 つとめます

念仏申して生きることが、生きる意義がはつ

きりすることです。『仏説無量寿経』に

愚痴蒙昧にしてみづから智慧ありと以うて生の従来するところ、死の趣向するところを知らず

(註釈版聖典70頁)

とあります。どこから来て、どこへ帰っていくのか知らない私です。そのような私に生きる方向を指し示してください。がお念仏です。

そのお念仏による仏恩報謝の生活では、このように素晴らしい心安らぐ日常が送れるということです。

そのために、私たちはとにかく「阿弥陀如来のよび声に呼応」しなければなりません。この呼応することが「ご信心をいただく」という意味でもあります。まず私たちが聞法にはげみ、そして少しでも如来のお心になう生き方を目指し、「日々に 精一杯 つとめ」なければなりません。

立教開宗の書

『教行信証』撰述の意義

岡村 喜史氏

本年は親鸞聖人がご誕生されて850年、来

りつきようかいしゅう

年は立教開宗800年にあたることから、本

山では3月29日から親鸞聖人御誕生850

年・立教開宗800年慶讃法要を営む。立教開

きようさんほうよう

宗の年は、親鸞聖人の主著『教行信証』(てい

きようぎょうしんしやう

けんじようどしんじつきようぎやうしやうもんるい
頭浄土真実教行証文類)』が成立したとされる元仁元年(1224、聖人52歳)定められる。慶讃法要を前にあたためて『教行信証』(せんじゆつ)撰述の意義を本願寺史料研究所の岡村喜史上級研究員に執筆してもらった。

「わが元仁元年」

私たちが阿弥陀如来の本願を信じて念仏させていた、だくという浄土真宗の教えを開いてくださったのは、親鸞聖人です。親鸞聖人は『教行信証』(正式には、『頭浄土真実教行証文類』)にこの教えをまとめられました。

親鸞聖人がいつ『教行信証』を著されたのかについては、そのなかの「化身土文類」からわかります。ここには、お釈迦さまが入滅されてから、正法・像法を経て末法の世に入ったとされる年代を計算した部分があります。これによ

しょうぼう ぞうぼう まつぼう

ぼく

るとお釈迦さまの入滅は、中国の周王朝の穆王の53年(紀元前949)で、その年から自身がいる「わが元仁元年」までは2173年が経過しており、この年は末法に入ってから673年になると記されています(註釈版聖典417頁)。

このように親鸞聖人は、『教行信証』のなかで「わが元仁元年」と、自身がいる年をはつきりと記されていることから、元仁元年(1224)が『教行信証』撰述の基準になる年とされ

『教行信証』は大部なたいぶおお聖教で、その内容は論理立てて記述されています。このことから、親鸞聖人のなで、浄土真宗の教えがこの時点で、全体の構成が論理的に体系立てて整理されていたため、その撰述が可能となっていたのです。

親鸞聖人は、『教行信証』の「教文類」の冒頭で、「つつしんで浄土真宗を案ずるに」（同135頁）と書いて、『教行信証』が「浄土真宗の書」であることを位置づけておられます。ただここでいう「浄土真宗」とは、法然聖人の開いたお念仏の教えのことなのです。

それでは親鸞聖人は、なぜこの時、このように大部な聖教をまとめられたのでしょうか、その目的について考えてみたいと思います。

なぜ親鸞聖人は撰述を？

親鸞聖人は、『教行信証』自体をすべて漢文で書かれています。このことから、広く関東の門弟に向けて書かれたとは考え難いでしょう。すると親鸞聖人は、この時、誰に対して『教行信証』を撰述しようとしたのでしょうか。

建仁元年（1201）に比叡山を下りた親鸞聖人は、念仏を称えればどんな人でも平等に阿弥陀如来に救われるという専修念仏の教えを広めていた法然聖人のもとへ行かれました。親鸞聖人は、法然聖人の教えをしつかりと受けとめ、四年後の元久2年（1205）には

法然聖人が著した『選択集（選択本願念仏集）』を書き写すことを許されました。法然聖人にはたくさんのお弟子がいましたが、法然聖人自身から『選択集』の書写を許されたのは親鸞聖人などわずかな人しかいなかったようです。親鸞聖人は、短い期間で法然聖人の専修念仏の教えをきっちり理解されており、そのことを法然聖人から認められたのです。

親鸞聖人は、『選択集』の書写と法然聖人の真影の制作が許されたことを、『教行信証』のなかに「これ専念正業の徳なり、これ決定往生の徴なり。よりて悲喜の涙を抑へて由来の縁を註す」（同473頁）と書いて、自身が法然聖人の教えを忠実に受け継いでいることを表明しておられます。



その後、親鸞聖人は承元元年（1207）の専修念仏停止による「承元の法難」で、越後に流罪となりました。建暦元年（1211）に赦免されましたが、京都には戻らず常陸国（茨城県）稲田に移られ、ここを中心にお念仏の教え

を広められました。

建暦2年（1212）に法然聖人が亡くなられた後、法然聖人の教えを少しずつ独自の解釈していく門弟も出てくるようになりました。こうしたなか、比叡山が法然聖人の門弟たちを警戒し、再び専修念仏を禁止するように動き出しました。そして「元仁元年」の3年後にあたる嘉禄3年（1227）には、本格的な弾圧が起

こつています。「嘉禄の法難」です。

関東で暮らす親鸞聖人は、このように進む専修念仏への弾圧を危惧して、本当の法然聖人の教えが間違ったものではないと示す必要性を感じておられたのでしょうか。それは、法然聖人の門弟たちに、親鸞聖人が法然聖人から受けた真髓の教えの内容を、自身の論理構成に基づいて示すことを考えられたからです。

また、「元仁元年」は法然聖人の13回忌にあたる年ですから、『教行信証』撰述には法然聖人のことを意識しておられたことがわかります。ただ、親鸞聖人は、『教行信証』をまとめるにあたって関東在住期だけでは完成に至らず、60歳を過ぎて京都に戻った後も、完成のために加筆訂正を続けていかれました。

法然聖人の教えを受けた門弟たちから、さまざまな解釈が出てくるなか、親鸞聖人は、法然聖人が説かれた念仏の教えの真髓は、阿弥陀如来の本願のはたらきであるとして、『教行信証』を撰述し、その聖教を「浄土真宗の書」と位置付けられました。

この『教行信証』撰述があったからこそ、浄土真宗が広まり、今日まで伝わっていると言えるのではないでしょうか。

稱讃寺 行事予定

二〇二三年 二月の行事予定



六日（月）のんのん法話会 一四時

一六日（木）のんのん法話会 一四時

一九日（日）春季彼岸会法要 一四時

二六日（日）のんのん法話会 一四時

たいせつ
ひと
大切な人と

きょうはな
今日話そう

二〇二三年「心のともしび」三月カレンダーより

「本願寺たすけあい募集」について

- 募金の名称 ①「ウクライナ緊急支援募金」
②「トルコ・シリア地震緊急支援募金」

- 受付口座番号（①②同じ）

〈銀行振込〉 銀行 ゆうちょ銀行
店名 一〇九（イチゼロキュウ）店
番号 当座 〇〇69957
名義 たすけあい募金

- 通信欄記載について

- ①の募金の場合は、「ウクライナ緊急支援」とご記入ください。
- ②の募金の場合は、「トルコ・シリア地震緊急支援募金」とご記入ください

編集後記（愚案）

ユーミンは名曲「卒業写真」で歌った。〈人ごみに流されて 変わってゆく私を／あなたはときどき遠くでしかって〉。あなたは誰だろう。かつては憧れの異性のことだと思っただけだった。でも、いまは、18歳の自分だと思ふ。変わろうか▼旅立ちの季節である。南からの風も春の兆し。きょうは多くの高校で卒業式が開かれる。聞えてくるのはマスクをつけるか、外すか。思えば今年の卒業生は、高校時代をまるまるコロナ禍に翻弄された世代となった▼・・・ユーミンが歌ったように、ひとは変わる。卒業して、大人になって。でも、コロナ下での学園生活を悩んだ18歳の自分は消えない。〈あの頃の生き方を あなたは忘れないで〉。すべての卒業生に、祝福を。（『朝日新聞』三月一日号「天声人語」より）

私も好きな歌ですが、ついつい、あの頃は良かったとか、あーしとけば良かったなどと、懐古の念に駆られたり、懐古の情に堪えなかつたりする方が多いです。初心に返ってほしいもすれども、なかなか難しいですね。そんな私であっても、阿弥陀さまは、ずっと変わらないうちに、私を包んでくださっていると、南無阿弥陀仏と呼び続けておられるのですね。